

ヘモグロビンサブユニットの過酸化水素によるヘミクロームの生成

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/8679

ヘモグロビンサブユニットの過酸化水素による ヘミクロームの生成

金沢大学医学部生化学第一講座 (主任: 米山良昌教授)

金沢大学医学部生化学第一講座 (指導: 友田燁夫講師)

杉 本 和

(昭和52年10月6日受付)

ヘミクロームはヘム鉄の第5, 第6配位座にイミダゾールなどの塩基性窒素が結合したヘムの誘導体であるが, ヘモグロビンから誘導されるヘミクロームは第5位にグロビンのF(8)ヒスチジン, 第6位にE(7)ヒスチジンが結合していると考えられている¹⁾.

ヘモグロビン由来のヘミクロームは生体内ではハイソツ小体の成分としてサラセミア血症, 一部の不安定血色素症の赤血球内に存在することが確められており, ヘモグロビンの変性, 更に分解の中間体と考えられる^{2,3)}. それ故ヘミクローム生成の機序を明らかにすることはヘモグロビンの変性, 次いで起こる赤血球の破壊の過程を知る上に重要と思われる.

これまで *in vitro* でのヘモグロビン由来のヘミクローム生成はヘモグロビンサブユニットの自動酸化⁴⁾, 異常ヘモグロビンの自動酸化⁵⁾, またはフェリシアン塩, サリチル酸塩などの酸化剤によるヘモグロビンサブユニットの酸化⁶⁾においてみられることが報告されている. しかし, これらの報告は生理的条件からはずれたpH, 温度, あるいは非生理的物質である酸化剤の使用による実験にもとづいており, 生体内でのヘミクローム生成の原因および過程を説明できるとは考えられない.

そこで生体内に生理的に存在すると考えられる過酸化水素およびその生成系を用いてヘモグロビンサブユニットへの影響をみたところヘミクローム生成が容易に起こることが明らかになった. そこで種々の条件下で過酸化水素によるヘモグロビンサブユニットのヘミクローム生成を調べた. 本報告ではこれらの実験結果から, ヘミクローム生成とヘモグロビン構造との関係, ヘミクローム生成に対するヘモグロビンのSH基の役割を検討し, 赤血球内でのヘミクローム生成の可能性とその機構の解明を試みた.

実験材料および実験方法

1. 実験材料

ヘモグロビンは正常赤血球から Huisman らの方法⁷⁾で DEAE Sephadex カラムクロマトグラフィで精製した. 精製した標品は catalase, superoxide dismutase (以下 SOD と略記) の活性はみられなかった.

ヘモグロビンの α 鎖, β 鎖は Bucci の方法⁸⁾に従いヘモグロビンに p-chloromercuribenzoate (以下 PCMB と略記) の添加により分離した. ヘモグロビンサブユニットに結合した PCMB の除去は Tyuma らの方法⁹⁾によった (以下遊離の SH 基をもった α 鎖, β 鎖をそれぞれ α_{SH} , β_{SH} , PCMB の結合した α 鎖, β 鎖をそれぞれ α_{PMB} , β_{PMB} と略記).

2. 過酸化水素によるヘミクローム生成

ヘモグロビンサブユニット 30 ~ 50 μ M を含む 0.1M リン酸緩衝液 (pH7.0) に過酸化水素 120 μ M を加え, Hitachi 124 自記分光光度計またはユニオン技研 SM401 型自記分光光度計を用い吸収スペクトルの変化を波長 578nm または 500 ~ 650nm, 240 ~ 320nm にて 25°C で測定した.

3. 過酸化水素生成系によるヘミクローム生成

酵素による過酸化水素生成系として xanthine oxidase 系および glucose oxidase 系を用いた. これらの系では 1mM xanthine, 1mM glucose を基質として用い 0.1M リン酸緩衝液中, 25°C でそれぞれ 30 μ M/min, 15 μ M/min の速度で過酸化水素を生成した. これらの酵素系を用いてヘモグロビンサブユニットのヘミクローム生成を 578nm の吸収の変化で調べた.

4. ESR (電子スピン共鳴 electron spin

Hemichrome Formation from Hemoglobin Subunits in the Presence of Hydrogen Peroxide. **Kazu Sugimoto**, The First Department of Biochemistry. (Director: Prof. Y. Yoneyama.), School of Medicine, Kanazawa University.

resonance) スペクトルの測定

ESR スペクトルは0.1M リン酸緩衝液(pH7.0)中, 室温で α_{SH} (0.65mM) または β_{SH} (0.73mM) に過酸化水素 (1.2mM) を添加後, それぞれ 20 分後, 15 分後に日本電子 JES-PE-3X 電子スピン共鳴装置を用い, X バンドにおいて -150°C で測定した.

5. PCMB 添加の実験

β_{SH} (25 μM) および α_{SH} (25 μM) に PCMB を濃度を変えて (0 - 50 μM) 添加後, 過酸化水素 (120 μM) によるヘミクローム生成速度を 25°C , 578nm で測定した.

実験結果

1. 過酸化水素によるヘモグロビンサブユニットの酸化

α_{SH} , α_{PMB} , β_{SH} , β_{PMB} の過酸化水素による可視部吸収スペクトルの時間的変化を図 1 に示す. 過酸化水素によりヘモグロビンの 541nm, 578nm の吸収の山は消失し 535nm に吸収の山, 565nm に肩をもつヘミクローム型の吸収があらわれる. このさい 525nm および 582nm に等吸収点が見られる. さらに放置するとヘミクローム型の吸収スペクトルの基線が上昇してくるがこれはヘミクロームは不安定であって沈澱しやすいのでそのためと思われる. 図 1 (D) に示すように β_{PMB} でとくに沈澱生成が早い. 生成したヘミクローム型の吸収はヒドロサルファイドで還元すると図 1 (A) 破線に示すように 558, 528nm に吸収の山をもつヘモクローム様物質が得られる. これらの図より過酸化水素に対する反応性は $\beta_{PMB} > \alpha_{PMB} > \alpha_{SH} > \beta_{SH}$ の順に高いことがわかる.

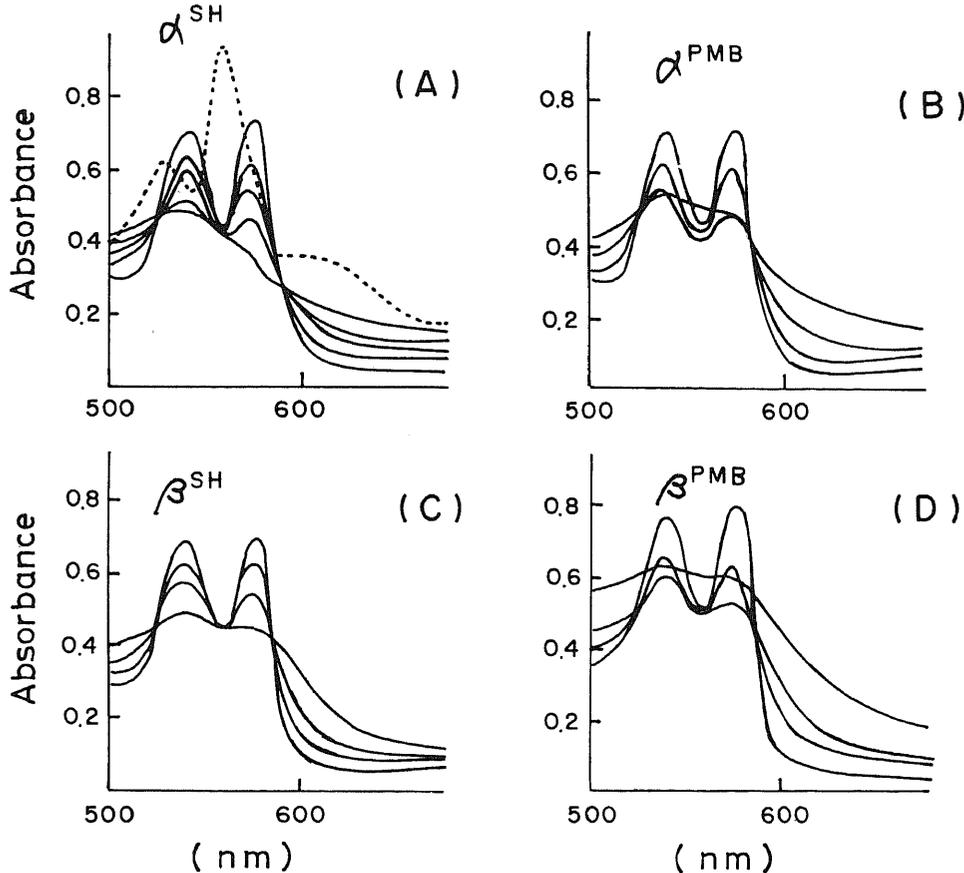


図1 過酸化水素によるヘモグロビンサブユニットの時間的変化

- A) α_{SH} (48 μM) 過酸化水素添加後 0, 0.5, 2, 5分後
- B) α_{PMB} (47.9 μM) 過酸化水素添加後 0, 0.5, 2, 4分後
- C) β_{SH} (46.7 μM) 過酸化水素添加後 0, 0.5, 2, 10分後
- D) β_{PMB} (52.7 μM) 過酸化水素添加後 0, 0.5, 2, 5分後

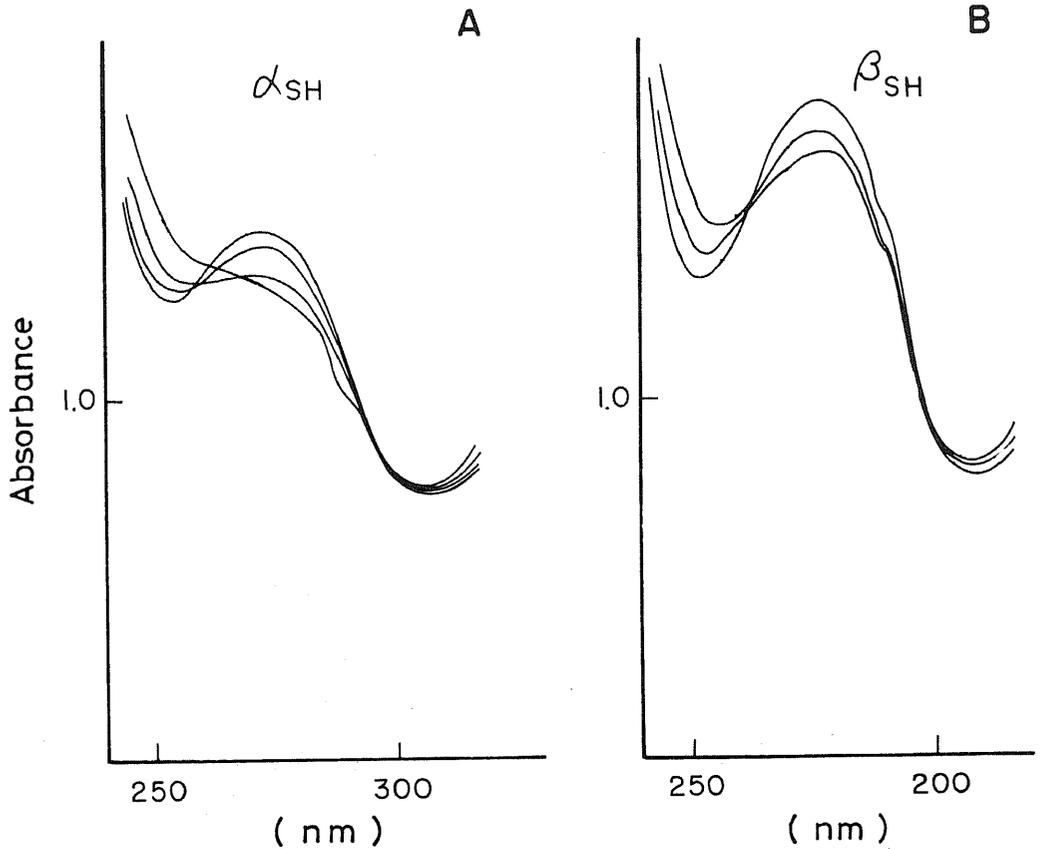


図2 過酸化水素によるヘモグロビンサブユニットの時間的变化

A) α_{SH} (49.0 μ M) 過酸化水素添加後 0, 0.2, 1, 3分後

B) β_{SH} (47.0 μ M) 過酸化水素添加後 0, 1, 3分後

過酸化水素による吸収の変化は紫外領域においても観察される(図2A,B)。274.5nmの吸収減少はチロシンおよびトリプトファンを分解を意味すると思われる。これらの吸収はヘミクロームに特有であることが知られており、ヘモグロビンサブユニットは過酸化水素によりヘミクロームに変化することが紫外領域においても認められる。

過酸化水素によるヘミクローム生成反応は 1000 unit catalase により完全阻害されるが、30 unit SOD による影響は全くみられない。

2. 過酸化水素生成によるヘミクローム生成

Xanthine oxidase 系と glucose oxidase 系は過酸化水素を生成することが知られているが、これらの酵素系によるヘモグロビンサブユニットのヘミクロームの変化を 578nm の吸収で測定した(図3)。 α_{SH} 、 β_{SH} いずれの場合もこれらの酵素系の添加後、経時的に 578nm の吸収は減少する。最終生成物の可視部

吸収スペクトルは過酸化水素による酸化生成物と一致するのでこれらの反応系で生成する物質はヘミクロームであると考えられる。これらの反応系では 1000 unit catalase により約 88% のヘミクローム生成の阻害がみられるが、30 unit SOD の存在下では xanthine oxidase 系でいく分促進効果があった。

3. ESR によるヘミクロームの同定

過酸化水素によるヘモグロビンサブユニットの酸化生成物がヘミクロームであることをさらに同定するために ESR を用いた。図4は α_{SH} 、 β_{SH} に過酸化水素を加えてからそれぞれ 20 分後、15 分後の ESR スペクトルである。 $g = 2.45, 2.29, 2.05$ に吸収の山がみられ、 $g = 6$ 付近の高スピン領域には吸収はみられない。これはヘミクロームの典型的な ESR スペクトルとして報告されているもの⁶⁾とよく一致している。

α_{SH} において特にみられる $g = 2$ の大きな吸収は本実験で特異的に観察されるが、これはスーパーオキ

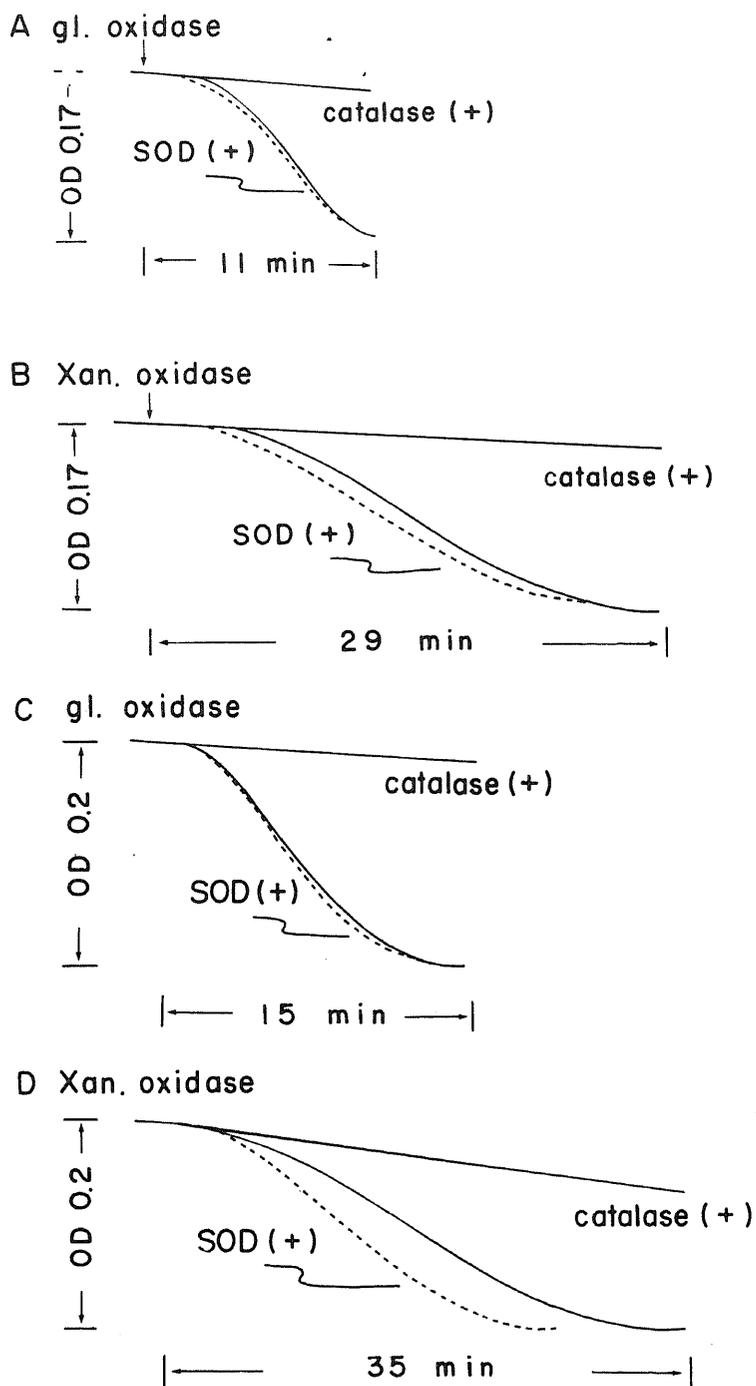


図3 過酸化水素生成系によるヘモグロビンサブユニットの酸化
 A) グルコースオキシダーゼ系による α SH ($42.7\mu\text{M}$) の変化
 B) キサンチンオキシダーゼ系による α SH ($42.7\mu\text{M}$) の変化
 C) グルコースオキシダーゼ系による β SH ($42.0\mu\text{M}$) の変化
 D) キサンチンオキシダーゼ系による β SH ($42.0\mu\text{M}$) の変化

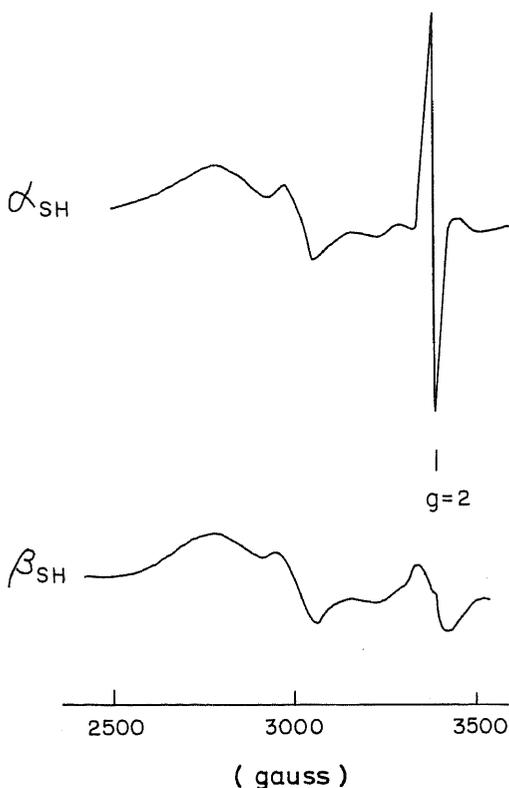


図4 過酸化水素添加後のヘモグロビンサブユニットの ESR スペクトル
 α_{SH} (0.65mM), β_{SH} (0.73mM) に過酸化水素 (1.2mM) を添加後それぞれ20分後, 15分後

サイドラジカルの ESR スペクトルとして知られている g 値¹⁰⁾と一致するが, しかしその本体については明らかでない。

4. ヘミクローム生成と SH 基

図1に示すように α_{SH} , β_{SH} に比し α_{PMB} , β_{PMB} ではヘミクローム生成が速い。これはヘモグロビンサブユニットの SH 基に PCMB の結合がヘミクローム生成に関係していることを示唆する。そこで SH 基への PCMB 添加の比率とヘミクローム生成速度の関係を α 鎖および β 鎖について調べた (図5)。

SH 基への PCMB 添加によりヘミクローム生成速度は PCMB の濃度に比例して上昇し, 1 分子の α 鎖に対し 1 分子以上の PCMB, 1 分子の β 鎖に対しては 2 分子以上の PCMB の存在下でヘミクローム生成速度は最大に達する。この最大値は α_{PMB} および β_{PMB} の速度と一致し, 最大速度を持つときは α 鎖に存在する 1 個の SH 基, β 鎖では 2 個の SH 基に対し PCMB

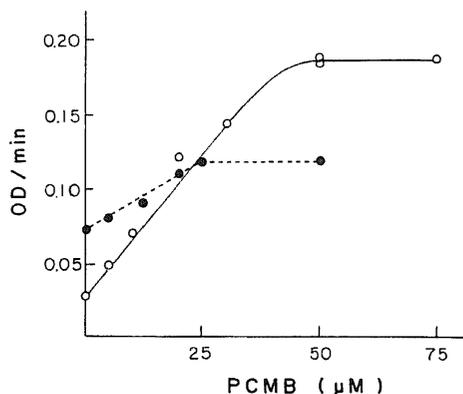


図5 β_{SH} (○—○) および α_{SH} (●—●) の PMB 化とヘミクローム生成速度

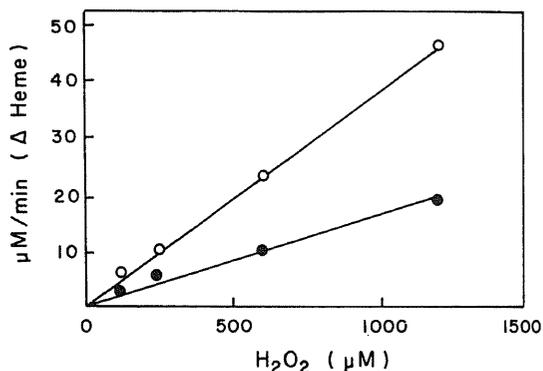


図6 過酸化水素濃度の影響

が飽和していることがわかる。以上のことから α_{SH} と α_{PMB} の反応速度の差および β_{SH} と β_{PMB} の反応速度の差は PCMB の結合によって生じるといえる。

5. 過酸化水素濃度との関係

ヘモグロビンサブユニットと過酸化水素の反応様式を知るために, 過酸化水素の濃度を 120 ~ 1200 μ M の範囲で変えヘモグロビンサブユニット (α_{SH} , β_{SH}) のヘミクローム形成の初速度を測定した。図6に示すようにヘミクローム生成の初速度は過酸化水素濃度に比例する。この比例関係はヘミクローム生成がヘモグロビンサブユニット中のヘム鉄と過酸化水素との二次反応であることを示す。二次反応として α_{SH} , β_{SH} の反応速度定数を計算するとそれぞれ $9.2 \times 10^2 M^{-1} \cdot \text{min}^{-1}$, $3.82 \times 10^2 M^{-1} \cdot \text{min}^{-1}$ となる。これらの結果からヘモグロビンサブユニット中のヘム鉄 1 分子は過酸化水素 1 分子と反応してヘミクロームを生成すると推定される。

考 察

Brunori ら⁴⁾はヘモグロビンサブユニットの自動酸化、Rachmilewitz ら⁶⁾はフェリシアン塩などの酸化剤を用いたヘモグロビンサブユニットの酸化にさいしてヘミクロームの生成がみられることを報告している。これらの研究者はヘモグロビンが四量体の状態ではヘミクロームが得られないことも示している。一方、ヘモグロビン四量体は過酸化水素によりメトヘモグロビンを形成することを Eyer¹¹⁾が報告している。著者ら（未発表）も正常ヘモグロビン四量体に過酸化水素を作用させた場合はメトヘモグロビンを形成することをみ、Eyer らの報告を確めた。

これらのことから正常ヘモグロビン四量体とヘモグロビンサブユニットとでは酸化に対する反応様式の違いがあると考えられる。そしてこの反応様式の差異はヘモグロビンの構造と関連があると思われる。すなわちヘモグロビン四量体はいわゆるヘム間相互作用がありこの相互作用の発現には α 鎖、 β 鎖間接触面が重要なことが知られているが、この α ・ β 鎖間接触面はまたヘムにも近くヘモグロビンの過酸化水素との反応にも α 鎖、 β 鎖よりなるヘモグロビン四量体と同種の鎖よりなるサブユニットとの間に差異を生ずるのであろう。つまり四量体内で α 鎖、 β 鎖が配置することにより E(7) ヒスチジンのヘム鉄第 6 配位を妨げ、そのためヘミクローム生成が起らずヘム鉄の酸化のみが行われてメトヘモグロビンが生成されるといえる。

一方ヘモグロビンサブユニットでは α 鎖、 β 鎖の同種鎖のみよりなるので E(7) ヒスチジンはヘム鉄第 6 位に容易に結合でき、ヘミクロームの生成にいたると考えられる。

不安定血色素ではそのほとんどがヘム鉄近傍の変異、一部は α ・ β 鎖間接触面近くに変異があるがそのため過酸化水素による酸化によって E(7) ヒスチジンのヘム鉄との結合が容易となりヘミクロームを生成し、最終的にはヘモグロビンの変性物であるハイנטツ小体生成をみると思われる。

フェリシアン塩などの酸化剤によるヘモグロビンサブユニットのヘミクローム生成時には中間体としてメトヘモグロビンサブユニットが存在することが吸収スペクトルと ESR スペクトルから同定されている⁶⁾。過酸化水素によるヘモグロビンサブユニットの酸化においては図 1 にみられるように混濁を原因とする基線の上昇以外には等吸収点のずれはみられず吸収スペクトルからはメトヘモグロビンサブユニットの存在は考えられない。ESR スペクトルからもメト型ヘモグロ

ンに特有な $g = 6$ 付近のシグナルは反応の過程中心または反応後にも検出されなかった。

過酸化水素によるヘミクロームの生成はメトヘモグロビンサブユニットを中間体としないと考えるのは以上の結果に加えてシアン塩存在下でのヘミクローム生成の実験による。メトヘモグロビンサブユニットにシアンが配位したシアン化メトヘモグロビンサブユニットは安定であってフェリシアン塩または過酸化水素によってヘミクロームを生成しない。シアン塩存在下でのフェリシアン塩によるヘモグロビンサブユニットの酸化ではシアン化メトヘモグロビンサブユニットが最終生成物であり、ヘミクロームの生成はみられない¹²⁾。ところが過酸化水素によるヘモグロビンサブユニットの酸化ではシアン塩の有無にかかわらず生成するのはヘミクロームであり、メトヘモグロビンサブユニット、あるいはシアン化メトヘモグロビンサブユニットの生成は全くみられなかった。

これらの事実から過酸化水素によるヘモグロビンサブユニットの酸化はフェリシアン塩などの酸化剤による酸化と違った反応過程をとるのであってメトヘモグロビンサブユニットのような中間体は存在しないといえよう。

α または β 鎖の SH 基を PCMB 化するとヘミクローム生成は速くなる（図 1）。またヘミクローム生成速度はヘモグロビンサブユニットの PCMB 化に比例する（図 5）。これらのことはヘモグロビンサブユニットに存在する SH 基が過酸化水素による酸化反応に影響をもつことを示す。SH 基の PCMB 化はヘモグロビンの三次構造の変化を容易にすると考えられる。

ヘミクローム生成の際、一部の SH 基が酸化されるという報告がある^{5,14)}。また SH 基の酸化がヘミクロームないしハイנטツ小体生成に関係するという説¹⁵⁾もあるが、Winterbourn ら¹⁴⁾は SH 基の酸化とヘミクローム生成とは直接関係がなく、SH 基はフリーラジカルのスカベンジャーとして働くのではないかと述べている。

ヘモグロビンサブユニットの自動酸化⁴⁾、異常ヘモグロビンの自動酸化¹⁴⁾では SOD により酸化が阻害されるが、本論文では図 3 にみられるように SOD により阻害は認められずむしろ促進がみられた。SOD はスーパーオキシドから過酸化水素を生成する反応を触媒するが、生成した過酸化水素がヘミクローム生成反応に関与するため SOD がヘミクローム生成を促進する結果となるものと思われる。Xanthine oxidase 系で SOD 促進効果がみられたのは xanthine oxidase 系が過酸化水素のみならずスーパーオキシドを生成

するためと考えられる。

過酸化水素生成系によるヘミクローム生成は図 3 に示すように catalase により完全に阻害されるものではないこと、catalase の過酸化水素に対する Km が高いこと¹⁶⁾から catalase 活性の高い赤血球内においても catalase による分解をまぬがれた過酸化水素がヘモグロビンを酸化する可能性は大きい。ことにサラセミア血症のように過剰の α 鎖または β 鎖が存在する場合、過酸化水素による持続的酸化がヘミクローム生成をもたらすものと考えられる。

結 語

1. ヘモグロビンサブユニットは過酸化水素および xanthine oxidase 系, glucose oxidase 系などの過酸化水素生成系により低スピン三価鉄化合物に酸化された。この酸化物は吸収スペクトルと ESR とからヘミクロームであることが明らかになった。このヘミクローム生成反応は catalase により阻害されるが、SOD では殆んど影響がない。

2. ヘモグロビンサブユニットの過酸化水素によるヘミクローム生成は α_{PMB} と β_{PMB} の反応速度が α_{SH} と β_{SH} のそれより速かった。

これらのヘミクロームは直接 2 価のオキシサブユニットより生成され、その間に 3 価のメト型を経由しない。

3. ヘモグロビンサブユニットの過酸化水素によるヘミクローム生成の二次反応速度定数は α_{SH} で $9.2 \times 10^2 M^{-1} \cdot \text{min}^{-1}$ 、 β_{SH} で $3.82 \times 10^2 M^{-1} \cdot \text{min}^{-1}$ となった。

4. 正常ヘモグロビン四量体は過酸化水素によりメトヘモグロビンに酸化されるが、ヘミクロームは生成しないことが知られている。ヘモグロビン四量体では $\alpha \cdot \beta$ 鎖の四量体内配置のためにヘミクローム生成をみないものと思われる。

5. これらの成績にもとづき異常ヘモグロビン血症やサラセミア血症におけるヘミクローム生成に過酸化水素が関与しうることを論じた。

終始御懇篤なる御指導と御校閲を戴いた米山良昌教授に深く感謝いたします。

また、御教示と御助力を戴いた友田輝夫講師はじめ第一生化学教室員各位に厚く御礼申し上げます。

文 献

- 1) Rachmilewitz, E. A. : Red Cell Structure and Metabolism (ed. by Ramot B.) p.94, Academic Press, New York, 1969.
- 2) Rachmilewitz, E. A., Peisach, J., Bradley, T. B. & Blumberg, W. E. : Nature, 222, 248 (1969).
- 3) Rachmilewitz, E. A. & White, J. M. : Nature New Biol., 241, 115 (1973).
- 4) Brunori, M., Falcioni, G., Fioretti, E., Giardina, B. & Rotilio G. : Eur. J. Biochem., 53, 99 (1975).
- 5) Winterbourn, C. C. & Carrell R. W. : J. Clin. Invest., 54, 678 (1974).
- 6) Rachmilewitz, R. A., Peisach, J. & Blumberg, W. E. : J. Biol. Chem., 246, 3356 (1971).
- 7) Huisman, T. H. J. & Dozy, A. M. : J. Chromatogr., 19, 160 (1965).
- 8) Bucci, E. & Fronticelli, C. : J. Biol. Chem., 240, PC 551 (1965).
- 9) Tyuma, I., Benesch, R. E. & Benesch, R. : Biochemistry, 5, 2957 (1966).
- 10) Knowles, P. F., Gibson, J. F., Pick, F. M. & Bray, R. C. : Biochem. J., 111, 53 (1969).
- 11) Eyer, P., Hertle, H., Kiese, M. & Klein, G. : Mol. Pharm., 11, 326 (1975).
- 12) Rachmilewitz, E. A. : Ann. N. Y. Acad. Sci., 165, 171 (1969).
- 13) Harvey, J. W. & Kaneko, J. J. : Br. J. Haematol., 32, 193 (1976).
- 14) Winterbourn, C. C., McGrath, B. & Carrell, R. W. : Biochem. J., 155, 493 (1976).
- 15) Jacob, H. S., Brain, M. C. & Dacie, J. V., : J. Clin. Invest., 47, 2664 (1968).
- 16) Ogura, Y. : Arch. Biochem. Biophys., 57, 288 (1955).

Abstract

Human hemoglobin subunits were converted to low spin ferric compound by hydrogen peroxide and hydrogen peroxide generating systems with xanthine oxidase or glucose oxidase. The low spin compound was identified as hemichrome by their optical and electron spin resonance spectra.

This conversion was completely or largely inhibited by catalase, while scarcely influenced by superoxide dismutase (SOD). P-Mercuribenzoate (PMB) derivatives of oxy α and β chains reacted faster with hydrogen peroxide than untreated oxy α and oxy β chains. The hemichrome was shown to be directly transformed from the oxy chains, not via met chains.

Normal hemoglobin tetramer is known to be oxidized by hydrogen peroxide to methemoglobin, not to hemichrome. It was considered that hemichrome formation was related to the quaternary structure of hemoglobin male and i. e., the polymerization of hemoglobin subunits to the tetramer seems to serve for protecting against the attack of oxidants, such as hydrogen peroxide.

Pathological importance of hydrogen peroxide was discussed from the view point of hemichrome formation associated with abnormal hemoglobin and thalassemia.
